

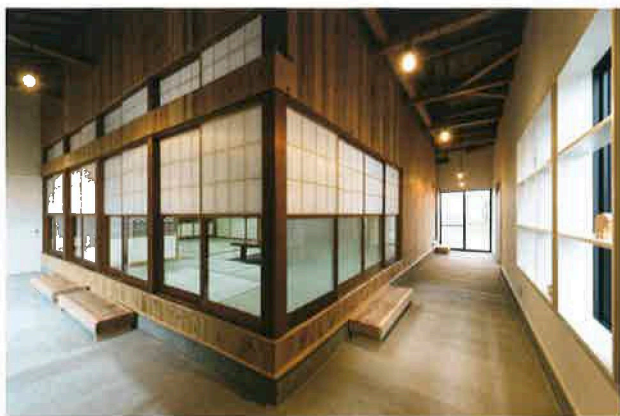
建築は人生



井口哲一のりかず

このたび「温故知新」の原稿執筆依頼を受け、10年前、独立に向け、勤めていた事務所を退社する際に師匠からいただいた言葉を改めて思い出しました。それは「建築家には3つのタイプがいる。一つ目は“用”の建築家。言われたことをするタイプ。二つ目は“筋”の建築家。自分のスタイルを通すタイプ。そして三つ目は“愛”の建築家。“愛”の建築家を目指しなさい」というもの。“愛”については具体的には述べられず、きっと「自分自身で考えなさい」ということだと受けとめました。

さて、“愛”の建築家とは。捉え方はさまざまあると思いますが、今、私の中にある1つの答えは、「いかに自分事になれるか」です。目の前のクライアントに対してはもちろん、地域や社会に対しても「どうしたら良くなるか」「自分なら」などと、いかに本気で相手の立場になれるかではないかと思っています。はたして、自分はそこに到達できているのか。いや、きっとゴールはないのではないのでしょうか。常に自問自答しながら、方向修正しながら活動していくことなのでしょう。そう考えると建築は人生そのものだとも思えてきます。考えたことや思いがカタチになる建築。条件が同じであっても、考え方や思いの方向によってカタチが異なる。ときに怖くなることもあります。多くのワクワクする場面に出会っているのは幸運です。これから先もさまざまなことが待ち構えているとは思いますが、自他共に「“愛”の建築家」と認められるよう、精進を重ねていこうと思います。



新潟市・Wさんの家(リノベーション)